「地球研言語記述論集」第２号
序文

大西 正幸

「地球研言語記述論集」第 2 号が発刊の運びとなった。

毎年 3 月に出版されるこの論集の母体は、地球研のインダス・プロジェクト言語研究 WG が毎月一度地球研で主催している、「言語記述研究会」である。長田さんの巻頭言にあるように、この研究会は、主に若手の、言語記述を専門にした研究者を中心に運営されている。論集の第 1 号を昨年の 3 月に出してからこの一年の間に、新たなメンバーが 3 名加わった。今号では、そのうち倉部さんと仲尾さんが、力のこもった論文を書いてくれた。研究会が着実に活動を続け、このような若手の研究者が育って行くのを見るのは、本当にうれしい。

「論集」に掲載された論文の多くは、定例の研究会での発表や、初稿の段階での読み合わせ、メールでのやりとり等を通して、メンバー同士での議論を繰り返している。さらに、最終稿を入稿する前に、少なくとも 2 名のメンバーが細部まで読んでコメントする手続きを経ている。こうした丁寧な手順を踏んでいるので、どの論文／資料集も、内容的に充実したものとなっていると確信する。

ここで、前号にならって、「論集」第 2 号に掲載された論文／資料集の内容を、順を追って紹介することにしよう。

まず、巻頭を飾るのは、林範彦さんの「チノ語悠楽方言の間接疑問文に関する覚え書き」である。チノ語は、中国の雲南省で話されているチベット・ビルマ諸語のひとつで、林さんは、昨年、この方言のすぐれた記述文法を出版している。掲載論文の細部にまで行き届いた議論は、この言語の文法の全体像をつかんだ研究者でなければ、よくなし得ないと思う。また、論文で扱われている「間接疑問文」は、記述の面でも類型論研究の面でも、比較的未開拓の領域である。本論で、林さんは、このトピックをめぐる記述／類型論的研究の現在の水準を見据え、文／節境界をめぐる統語構造を柱に類型論的な規準を立てて、チノ語内部における異なったタイプの疑問文の記述と、日本語、タイ語、漢語普通話との比較による言語横断的な分類を、同時に試みている。類型論と個別言語の記述が密接な関係にあることを示す好例である。

続く倉部慶太さんの「ジンポー (カチン) 語における動詞連続の文法化」は、ビルマ（および、チノ語と同じく中国雲南省、さらに東北インド）で話されるチベット・ビルマ諸語のひとつ、ジンポー（カチン）語の、動詞連続をめぐる詳細な記述である。この構文の共時的な記述に焦点を置いているが、動詞連続をいくつかの形態統語的基準によって定義し、先行する動詞が副詞

や補文標識になったり、後続動詞が補助動詞になったりという文法化の程度を、それらの定義によって測ることで、通時的な側面にも注意を払っている。そのため、ややもすればデータの羅列になりがちなこの種の記述に、厚みを与えることに成功していると思う。

仲尾周一郎さんの「ジュバ・アラビア語によるパリ民族の民話」は、スーダン南部で話されるこのピジンクレオール語の簡易文法と、フィールドで収集した二つの民話テキストから構成されている。簡易文法の部分は、この言語の音韻、形態、統語が見渡せるように過不足なくまとめられており、後半のテキストを読む時に大変役に立つ。論集第 1 号の林由華さんの「池間方言の談話テキスト資料集」に続く、すぐれた資料集である。テキストデータを文法記述の一環として提示することは、個別言語の記述の大きな目的の一つであり、毎号このような成果が積み重ねられて行くことは、嬉しいことである。

野島本泰さんは、2 篇の論文を寄せている。最初の論文、「神奈川県座間市の方言における、「必要」を表す「ようだ」」は、彼自身の母方言における「ようだ」の意味分析を詳細に行いながら、日本語の他方言におけるさまざまな用例と比較している。後ろの補遺は、データ収集のお手本のような記述となっている。もう一つは、「ブヌン語の、「のぞましくない状態」「姿勢」を表す形容詞の派生に用いられる接頭辞 matu- — 形態分析と意味記述」と題されている。彼が長年かかわっている、台湾のオーストロネシア語であるブヌン語南部方言についての論考で、この接頭辞の記述分析に関する中間報告といった内容である。中間報告と書いたが、限られたデータを整理して、その形態、意味をさまざまな観点から丁寧に記述し、その限界点を見ながら次の調査へと繋げて行く手順がよく見える。この 2 篇の論文を読んでいると、野島さんがフィールド調査を楽しんでいる様子が目の前に浮かび、その息遣いまで感じられてくる。

これに続き、鈴木博之さんも、2 篇の論文を寄せている。最初の「ヒャルチベット語松潘・山巴方言 [sKyangtshang] の格体系」は、ヒャルチベット語のこの方言の格体系を、中核項を示す文法格と、それ以外の格の、二つに分けて記述している。中でも、能格や与格の、標示される場合とされない場合の条件をめぐる記述が、詳細で興味深い。また、二篇目の「硬口蓋調音の多様性とその表記」では、現在の国際音声字母（IPA）には存在しない、2 種の（前部／後部）硬口蓋音を区別する記号の必要性を、カムチベット語の諸方言の記述をめぐる具体な事例をもとに詳しく論じている。専門の音声学をめぐる論文だけあって、論理の展開が緻密で説得的である。

下地理則さんの「伊良部島方言における述語部分の焦点化について」は、彼の両親の母語である南琉球宮古伊良部方言の、歴史的には「係り結び」に相当する文法現象のうち、動詞語幹の焦点化を扱ったものである。この現象は、従来の琉球語学では、動詞、焦点助詞、軽動詞の組み合わせによる分析的な構文として解釈されてきたが、下地さんはこの解釈に疑義を呈し、焦点助詞に相当するものを動詞の屈折接辞とする新たな分析を提示している。伊良部方言の超分節レベルでの音韻論に関する彼自身の研究成果を生かし、また語／倚辞（クリティック）／接辞の分節に関する近年の類型論研究の成果に目を配りながら、議論を展開している。一昨年上梓された記述文法の細部をさらに深めたものである。

論集の最後に掲載された稲垣和也さんと大西による 2 篇の論文は、パプアニューギニアのブーゲンヴィル島南部で話されるパプア語、ナゴヴィシ・シベ語とモトゥナ語を扱っている。

稲垣和也さんの「ナゴヴィシ・シベ語の類別詞」は、ナゴヴィシ・シベ語の類別詞の体系を、音韻論、形態論、意味論の観点から、詳細に記述している。「南ブーゲンヴィル語族」の 4 つの大きな言語の中で、ナゴヴィシ・シベ語だけが、これまでほとんど信頼できるデータが収集されていない。これらの言語に共通する、類型的に特に興味深い現象のひとつである名詞類別に関して、この言語のこれだけ詳細なデータが記述されるのは、もちろんはじめてである。またこのテーマに関する類型論研究の現在の水準にもよく目が配られていて、多角的なすぐれた分析となっている。この語族の諸言語の比較言語学的研究にとって、きわめて重要な記述であることは、言うまでもない。

大西の「モトゥナ語における Ci/Cu 音節の短縮化」は、モトゥナ語の Ci/Cu 音節が規則的にコーダ子音の /h/、/’/、鼻音と交替する現象を、まず共時的観点から記述分析したあと、通時的な観点からこの現象の起源を検証している。共時的な音韻現象を自然音韻変化として扱う、ブレヴィンスの「進化音韻論」の方法論を取り入れ、共時的な記述と通時的な記述との接点を探る試みである。また、モトゥナ語が属する「南ブーゲンヴィル語族」の主要言語（ナゴヴィシ・シベ語を含む）の比較音韻データ用い、特にコーダ子音に絞って再構を試みているが、これはこの語族の音韻体系全体の再構に向けての出発点を標したものである。

以上、掲載された論文／資料は、前号に続いて、どれも読み応えのある内容となった。執筆者の皆さん、建設的なコメントを寄せてくれたメンバーの皆さん、そして特に、最後の一ヶ月間、編集作業にかかりきりだった稲垣さん、ご苦労さまでした。

大西正幸